

記録

見学会＋シンポジウム「地域と大学の関りのこれから～箕面船場地域の発展～」

大阪大学 90 周年・大阪外国語大学 100 周年記念行事

主催：大阪大学、共催：箕面市・大阪船場繊維卸商団地協同組合・箕面船場まちづくり協議会

2021 年 12 月 5 日（日）13:30～16:30

場所：大阪大学 箕面キャンパス、ハイブリッド開催（対面＋オンライン）開催、参加者約 70 名

挨拶と話題提供の概要

（開会挨拶；山根聡、大阪大学言語文化研究科長、教授）

新キャンパスに対して地域の皆様から多大のご期待を頂いていることと思う。同時にキャンパスは学生そして卒業生にとってかけがえのない場所となる。これから地域の皆様とともにまちを発展させていくことを考えていきたい。

（吉岡聡司、大阪大学サステイナブルキャンパスオフィス准教授）

箕面市や地域のみなさまのご協力を頂きつつ長い協議を経てキャンパスを作ってきた。今後、例えば屋台誘致といった簡易的な事業コンペなど、まちを活性化する様々な手法を考えていくことが考えられる。まずはそれぞれの情報、イメージや意見を交わす場を持ちたいと考えている。

（上島一彦、箕面市長）

オレンジゆずるバスや船場のまちづくり等これまでの取り組みを通じて、住みよさランキング大阪府域 2 位、近畿 4 位（東洋経済新報社）、高い地価上昇率といった評価を獲得してきた。新病院整備や関西スポーツ科学・ヘルスケア総合センターなど、地域のポテンシャルを活かした取り組みを進めていきたい。

（小林利彰、箕面船場まちづくり協議会代表理事）

まちづくり協議会発足の経緯と、文化、交通、共生、子育ての各分科会の活動が盛んに動いている。子供たちを対象にした地下鉄のシールド工事見学会も実施した。動画で紹介したように、外国語学部生との草の根的な交流も始まっており、今後もっと交流を盛んにしていきたい。

（松尾憲久、大阪船場繊維卸商団地協同組合理事）

団地組合としてもサステイナブルな都市開発のために緑化を推進していきたいと考えている。ハードウェア的思考だけでなく、今後はソフトウェア思考による、自然環境や人的交流といった草の根的な「うまずたゆまず」の様々な活動との両輪で考えていきたい。

（竹村景子、大阪大学外国語学部長、教授）

未来を考える際には歴史を振り返ることも重要であり、外国語学部は大変ユニークな沿革をもっている。間谷時代から続いている市民講座や夏まつりがルーツとなっている国際フェスティバルをはじめとして、今後とも OU グローバルキャンパスの中核として地域との協働・共創・連携を進めていきたい。

（加藤均、大阪大学日本語日本学教育センター、教授）

当センターは世界中からくる優秀な留学生に対して基礎教育を行うとともに、日本文化を世界に発信していく役割がある。プロジェクト型授業（PBL）で外国人留学生に地域の探求を行わせると、例えば箕面市歌をジャズにアレンジするなど、地域の個性やその発信方法を真剣に考えてくるので、日本人が学ぶことも多い。

ディスカッションの概要（一部、質問への応答）

（松尾）

加藤センター長の「言語は文化である」という説明に感銘を受け、また、留学生と市民の交流が盛んであることを知った。そうしたことに貢献していきたい。

（上島）

ピロティと広場の一体的な利用には相当のポテンシャルがあると思っている。また小林代表理事のご発表にあった複合公共施設の大きな三角窓にイルミネーションを施すのはとても良いアイデアだと思った。また、松尾理事のご発表にあった組合の背割り道路を中心に緑化することを、自動運転の実証実験に使う等のアイデアとともに考えていきたい。また加藤センター長による市歌のお話は極めて興味深く伺った。



（小林）

松尾理事のご発表にあった無形の蓄積、自然発生的なものや「うまずたゆまず」という言葉に感銘を受けた。各セクターの情報共有、あるいはまち協の活動の発信の問題は重要だと思う。加藤センター長ご説明にあったPBL（プロジェクト型授業）のお話は大変参考になった。

（加藤）

市長のご発表で示された今後の発展のイメージにインパクトを受けた。例えば、キャンパス内に住む留学生にとっては町が東西に接続されることは大変重要であり、デッキの計画イメージを見せていただけて良かったと思う。

（竹村）

松尾理事がなされたまちを緑化していくお話や、これからはソフトウェア志向が必要になるという点に共感した。大学は、学生に対する教育としての木を、小さい木でも多数植えていくことの必要性が感じられた。また小林代表のお話からは学生が地域に積極的に関わっている様子を知ることができた。図書館での世界の絵本読み聞かせなども充実させていきたい。情報共有が重要であることもよくわかった。

旧キャンパスからどのようなことが変わったかというご質問については、旧キャンパスとは面積や施設内容が全く異なり、特に体育会系の課外活動が出来なくなったことは残念である一方、旧キャンパスやその周辺には福利厚生的なものが何もなくなかったということがいえる。新キャンパスに初めて来た学生は私学のように洗練された建物と感じたようだが、建物は時間が経つに従って古くなっていく。学生教職員とともにピロティや広場、建物を最大限に活用することを考えていきたい。

（松尾）

グリーンベルトの具体的な構築方法に関してどのように考えていくか、あるいは今後の繊維業について今後どのように推移すると考えられるかというご質問についてお答えしたい。この地域は1970ごろに100年のビジョンをもって大阪市内から組合を移転させてきた歴史がある。繊維業をとりまく国際的あるいは経済的な状況変化から、約25年前から組合では物流や産業を見直すことをはじめている。ものづくりと倉庫等がばらばらではなく、全体としてトライアルしていく場所にしていきたい。コロナ禍を経て物流と産業は大きく転換するはずで、さらに国際的なキャンパスのあるまちとなれば、多様な文化的背景をもった人々が集まることから、国内企業の関心も高まると考えられ、インキュベーションのまちへと発展させていくことを考えたい。

（上島）

船場地域での今後の産業のあり方を見据えたビジョンについては、産業やグリーンベルトの創出によって、まちの価値を高めることを考えていきたい。そのためにはゾーニングを見直すことが重要と考えている。船場東はもともと業務のための地域であり、交通や高さ規制、騒音など居住の条件とは相容れない部分がある。

高齢者施設のニーズが高いのではないかとご指摘については、近傍街区において市や組合と大阪大学が協力して計画を進めている関西スポーツ科学・ヘルスケア総合センターの上層にサ高住に対応できる

施設を入れることを考えたい。施設の建て替えは絶好のチャンスであり、高齢者や子育ての施設の計画について考えていきたい。

（吉岡）

「うまずたゆまず」に草の根的な活動を続けるというソフトウェア的な視点はとても重要だと思う。建物は古くなっていく一方であるが、ヨーロッパの古い町並みのように使い続けることで良さが出てくる面や、居住や産業が混在する部分に魅力が発生するという見方もあると思われる。都市計画の分野においてもそのような視点が強まっていると考えている。

（松尾）

ヨーロッパには古い建物を使い続ける文化や意思があり、見習う点があると思う一方、日本や中国では古くなった建物を更地にしてしまう発想が強いように思われる。日本は土地が狭いため、まちをコンパクトにしながら古いまちのゾーニングを整えつつも、年老いても幼いころの記憶の重要な部分は残っているようなまちづくりを考えたい。MAAS (ICT を用いた交通サービス) の実験的な取り組みのように、古いものの再生と新たな技術との組み合わせがカギになると思っている。

（上島）

キャンパスのあるまちとして、フォトニクスやヘルスケアに関する阪大発のベンチャーにも期待したい。万博のメイン会場はいずれ更地になるが、箕面船場ではこのようなまちづくりがレガシーになると考えている。

（加藤）

外国人留学生たちは大変優秀であり、多くは日本語でのコミュニケーションができることから、地域の人々と新しい文化をつくっていくことができると考えている。それができるのはここだけで、このキャンパスと地域との関係は外国人と日本人の共生モデルケースとなる。



（小林）

子どもたちに投資できる社会を考えていきたい。お見せした動画を作ったときに、日々の活動に若い世代の成人はもちろん学生や子どもたちにももっと参加してもらおうことの大切さを痛感したので、そのような参加が増えるように考えていきたい。

（竹村）

外国に恐れをもたない学生たちが多くを占めるこのキャンパスであるが、このまちの人々と学生が共創・協働できるようにするためには、まず日本語でコミュニケーションを上手にとることを教えていくことが重要であり、そのような教育に注力したいと考えている。

（まとめ；澤木昌典、大阪大学サステイナブルキャンパスオフィスキャンパスデザイン部門長、工学研究科教授）
この催しは、大阪大学 90 周年・大阪外国語大学 100 周年記念事業の一つであるが、新しいキャンパスがこれからいかに地域に溶け込んでいけるか、その出発点となったと思う。

市のこれまでの取り組みと将来のまちづくりイメージ、そして組合の緑化のイメージをご紹介していただき、また、まちづくり協議会の活動が 4 年間でここまで発展されてこられたことにも感銘をうけた。一方で外国語学部や日本語日本文化教育センターの歴史や特徴およびポテンシャルの一端をみなさまに知っていただくことができたと思う。

このキャンパスは地域へ投入されたカプセル薬のように、今後じわじわとカプセルが溶けて周辺のみなさまと化学反応を起こしてくだらう。副反応もあるかもしれないが、様々な地域貢献をもたらしていければと考えており、これからも今日のような場を継続的にもつことが重要である。

以上